様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００５６７

研究課題名（和文）文法規則からの逸脱に見えるのに容認可能となる現象の研究

研究課題名（英文）A Study of Apparent Deviant phenomena in English

研究代表者
中村　良夫（Nakamura, Yoshio）

横浜国立大学・大学院国際社会科学研究院・教授

研究者番号：２０２３７４４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、文法理論や語法研究で提唱される制約等から逸脱している（ように見える）のに容認される例を洗い出し、そのメカニズムを語彙や統語的なシステムの内外から探ることを目的とした。成果としては、英語の語法研究の分野で新しい事実の発見を行い、英語と米語の違いや、辞書に記載されている解説が現代では誤りと言える事例を指摘した伝統文法や学習文法のコンテクストにおける知見を含む書籍を2022年9月に出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英語の語法に見られるネイティブ・スピーカーの判断に揺れや変化が見られる現象（具体的には 'be likely to' の「人の性向や傾向を表す」用法でのアメリカ英語とイギリス英語の違い、assign と ascribe/attribute のカバーする範囲の違いに関して辞書間で見られる違い、disdainや scorn が動詞としての機能をなくしている事実、さらには辞書等でしばしば取り上げられている meticulous のアメリカ英語とイギリス英語における違いが現代のネイティブ・スピーカーの間では失われていること等）を指摘した。これらの成果は今後の辞書や文法書のアップデートに必須となる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to show the phenomena which apparently see deviant but actually acceptable. From the view point of syntax and lexicon studies, In doing so, I have published a book in which I observe several differences between American English and British English, as well as pointing out that some descriptions in several dictionaries are out of date.

研究分野：英語学

キーワード：英語学　言語学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は語法研究的な分野にも研究対象を広げており、次の例について話者の判断に違いが出ることを指摘している。

Take an umbrella with you in case it rains.

He left earl in case he should miss the last train (i.e. '… so that he should not miss it.')

Leech, G and J. Svartvik 1975. *A Communicative Grammar of English*

Give my child this toy in case he cries. (=Give my child this toy to prevent him from crying.)

《英》この子が泣くといけないからこのおもちゃをやってください『ジーニアス英和辞典』

第二例にあるようにイギリス英語において 'in case' の用法として「～しないように」という「予防」あるいは「阻止」の意味があることは多くの文献に取り上げられているが、研究代表者の調査によれば、イギリス英語の話者であっても (1c) は使わないという人もいる。

このように、' in case' という一つの表現についても状況によって話者の容認度に違いが出ることがあるという問題について、事例ごとにその要因を探ろうと考えたことが本研究を開始した背景である。

２．研究の目的

上記の例では、主節に記述されている内容と 'in case' 以下に述べられた内容の意味関係が関与していると考えられる。具体的には、上記第三例に違和感を持つ話者にも容認される上記第一例では、主節で述べられている状況（「早くでかける」）が起きると 'in case' 以下に記述されている事態（「最終列車に乗り遅れる」）は基本的に発生しないものと解釈できる。それに対して、第三例における主節の内容（「子供におもちゃを与える」）と 'in case' 以下に記述されている事態（「子供が泣く」）の間には、「子供におもちゃを与える」ことが「子供が泣く」という事態を阻止するという関係があるが、もう一つ、「子供が泣く」という事態が起きたら「子供におもちゃを与える」ということがありうる。このような一種の多義性は「予防」・「阻止」の意味を持つ第二例では発生していない。このような差異からネイティブ・スピーカーの判断の違いが生じると考えられる。本研究の目的は、このような例外的な文法判断の違いが発生する事例を発掘し、その原因を探ることに置いた。

３．研究の方法

本研究では、語法研究のみならず文法理論の枠組みから逸脱している（ように見える）のに容認される例を洗い出し、そのメカニズムを生成文法の統語的なシステムの内外から探ることも目的とした。たとえば、研究代表者がすでに指摘しているように、空所化構文においては、通常は下の例のように空所化によって残される要素 (remnant) 間には局所性の制約が課される

*John thinks that Bill will see Susan, and Harry ~~thinks that Bill will see~~ Mary.

しかしながら次の例に見られるように空所化の適用を受けた分の remnant が文中の焦点として強く意識されると容認可能となる。

話者A: Who thinks that Bill will see whom?

話者B: John thinks that Bill will see Susan, and Harry ~~thinks that Bill will see~~ Mary.

このような省略現象の特性を踏まえて、次のような省略現象の生起が影響を与えている現象に

ついて考察した。下記の例では、研究代表者がすでに指摘しているように、空所化が起きている場合に能動文（第一例）と疑似受動文（第二例）で前置詞残留の容認度が変わる。

第一例　John talked about Bill, and Mary about Susan.

　　* John talked about Bill, and Mary Susan.

第二例　* John was talk about by Bill, and Lucy (was) about by Nancy.

　　John was talk about by Bill, and Lucy (was) by Nancy.

本研究ではこのような事例について理論内での文派生のモデルと考え合わせて最新理論との整合性をもつ分析を試みた。

また、伝統文法や学習文法のコンテクストにおいては、用法の変化などについて事実の発掘を中心として行った。

４．研究成果

本研究では、一般的に提唱されている制約等から逸脱している（ように見える）のに容認される例を洗い出し、そのメカニズムを探ることを目的とした。枠組みとしては、伝統文法/学習文法および生成文法理論を両輪とした。生成文法理論関連の研究としては、英語の前置詞残留構文について、空所化に関するデータが疑似受動構文においてのみ特殊なふるまいを示す現象について、いわゆる reanalysis 現象とは受動分詞と前置詞の組成共有であるという分析を提示する論文を作成し海外ジャーナルに投稿した（2023 年7 月、*Linguistic Inquiry*）。当該論文は不採用となった（2024 年1 月）が、レフリーから空所化に関するデータは下の例を含めてさらに広い範囲で扱うべきであるとの指摘を受け、改訂した論文を国内ジャーナルに投稿準備中である。

*Mary bought a sculpture of a celebrity, but I don’t know who John did buy a photo of.

*Bill will read a movie about a war, but I don’t know what Kelly will read a short story about.

もう一つのアプローチとして、本研究では、伝統文法や学習文法、さらには語法研究のコンテクストで取り上げられるような事例についても考察を試みた。このような研究計画の実施として2022 年度に以下に例示した新たに発掘した英語の語法に見られる事実をまとめた。

ネイティブ・スピーカーの判断に揺れや変化が見られる現象（具体的には 'be likely to' の「人の性向や傾向を表す(human preferences/tendencies)」用法でのアメリカ英語とイギリス英語の違いがあり、アメリカ英語では下の例のような文が容認され、‘be likely to’ が「つい…しがちだ」の意味として使われることがある。

I am likely to get fat while in the US because everything is so delicious.

また、assign と ascribe/attribute のカバーする範囲の違いに関して辞書間で見られる違いについて、辞書によっては次のような例をあげているものもあるが、実際にはattribute が望ましいと考える話者が多いことも観察された。

He assigned his failure to his shortsightedness.

その他に、disdain や scorn が動詞としての機能をなくしている事実、さらにはしばしば辞書等で「時にけなして」として取り上げられているようにmeticulous には「細かすぎて神経質、うるさい」という意味合いがあるとされるが、調査してみるとアメリカ英語においてもイギリス英語においても現代のネイティブ・スピーカーの間ではそのような用法は失われており、ポジティブな意味合いでのみ用いられることが判明した。以上のような観察を取り入れた英語語彙に関する書籍を、研究代表者を筆頭執筆者として2022 年9 月に開拓社から出版したことが確定した主要な成果となる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 中村良夫、Alexander McAulay、高橋邦年、三品喜英	４．発行年 2022年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 580
３．書名 ニュアンスや使い分けまでわかる　アドバンスト英単語3000　〈大学上級レベル〉	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関